

令和 6 年 6 月 11 日現在

機関番号：15201

研究種目：基盤研究(C)（一般）

研究期間：2019～2023

課題番号：19K02706

研究課題名（和文）漢字語彙の運用力を育成するためのカリキュラム開発に関する研究

研究課題名（英文）Research on the Development of Foundational Frameworks for Kanji Vocabulary Curriculum to Foster the Ability to Use Kanji Vocabulary

研究代表者

富安 慎吾（tomiyasu, shingo）

島根大学・学術研究院教育学系・准教授

研究者番号：40534300

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 1,300,000円

研究成果の概要（和文）：本研究は、現在の漢字学習について、目的・方法・評価の三点が限定的であることに設定するものである。研究の進捗に伴い、主たる研究目的を、漢字学習の目的（能力観）を再設計し、カリキュラムを開発していくための基盤を構築することに定めた。具体的な研究としては、能力観を整理する枠組みを理論的に検討するとともに、小学校国語教科書を分析し、漢字学習内容をデータベース化することで、学習内容の実態を明らかにした。また、漢字学習方略を整理し、各領域の成果を統合する枠組みを形成した。これにより、運用力を高めるカリキュラム再設計の基盤を提供し、漢字学習の目的、内容、方法の相互関連を明らかにした。

研究成果の学術的意義や社会的意義

本研究は、漢字学習の現状の課題に対して、目的・方法・評価の三点を改善するカリキュラム改善に資する具体的な知見を提供したものである。学術的には、漢字学習の目的（能力観）を再設計し、データベース化された学習内容と学習方略の枠組みを構築したことにより、今後のカリキュラム改善に資する基礎を提供した点で意義がある。社会的には、これらの成果により、より本質的な漢字教育の実現が期待できる。特に、評価方法の再設計の基礎を確立することで、児童・生徒の「読字力」「書字力」だけでなく「運用力」の評価方法の開発に向け、重要な知見を提供するものである。

研究成果の概要（英文）：This study aims to address the three limited aspects of current Kanji learning: purpose, method, and assessment. As the research progressed, the main objective was established to redesign the purpose of Kanji learning, focusing on the view of ability, and to build a foundation for curriculum development. Specifically, the research involved theoretically examining the framework for organizing the view of ability, analyzing elementary school Japanese language textbooks, and creating a database of Kanji learning content to clarify the actual conditions of the learning content. Additionally, Kanji learning strategies were categorized, and a framework for integrating the results of each domain was formed. This provided a foundation for curriculum redesign to enhance functional proficiency in Kanji and clarified the interrelationships among the objectives, contents, and methods of Kanji learning.

研究分野：国語教育学

キーワード：漢字 語彙 カリキュラム

## 1. 研究開始当初の背景

本研究は、漢字学習の課題として、3点の課題を設定していた。

1点目は、「漢字学習の目的（能力観）の狭さ」である。現在の漢字学習においては、「書字力」と「読字力」に偏重して目的が定められており、「運用力」＝「漢字を運用して文章をよりよく理解したり書いたりする力」の育成は目的になりにくい。

2点目は、「漢字学習の方法の狭さ」である。1点目で述べた目的の狭さにともない、当然ながら、その学習方法も狭いものになる。このことは、学習方法が「書字力」と「読字力」とを伸ばすことに偏っており、「運用力」を伸ばす学習方法にはなっていないということである。

3点目は、「漢字学習の評価の狭さ」である。漢字学習の評価として、最も広く行われているのは「読字力」と「書字力」を問う漢字テストである。たとえば、相手に合わせて表記を選ぶ、などの「運用力」については評価が行われていない。

これら3点の「狭さ」は、漢字学習に関するカリキュラムの設計が十分でないことを示すものである。

## 2. 研究の目的

1において述べた背景をもとに、本研究は当初「読字力」「書字力」を習得する水準にとどまらない、漢字語彙を使いこなす高度な「運用力」の習得を支える漢字学習カリキュラムを、「理解・表現方略」を獲得するカリキュラムとして開発することを目的とした。

しかし、研究の進捗に伴い、カリキュラムの設計の前提となる「漢字学習の目的（能力観）」の再設計が必要であることが明らかになり、研究全体としては、次のように目的を整理して実施した。

- 1) 漢字学習の目的（能力観）を記述する枠組みを設計すること
- 2) 漢字学習の内容の実態を明らかにすること
- 3) 漢字学習の方法を整理すること

## 3. 研究の方法

本研究では、上記の目的 1) 2) 3) について、相互に関係づけながら、次のように実施した。

- 1) 漢字学習の目的（能力観）についての先行研究における議論を整理するとともに、本研究の課題である漢字学習の目的（能力観）の拡張を図るために、新たに学力を整理する枠組みを導入し、仮説を形成した。
- 2) 現在の漢字学習の内容の実態を明らかにするために、1) で作成した仮説をもとに、小学校国語教科書を対象として、漢字学習の内容についてのデータベースを作成した。また、漢字学習について何を学んでいるかを検討するために、漢字群それ自体や学習者の漢字に関する行為を分析する理論として、生態学的意味論に着目し、理論的な検討を行った。
- 3) 漢字学習の方法（漢字学習方略）を整理するために、国語教育分野・特別支援教育分野・日本語教育分野における先行研究の成果を整理するとともに、各分野の漢字学習方略を統合的に記述するための枠組みについての仮説を形成した。

## 4. 研究成果

以下では、本研究の成果について、2で述べた目的に沿って概観する。

### 1) 漢字学習の目的（能力観）を記述する枠組みの設計

本研究において、特に1) に取り組んだのは、論文①「漢字に関する学力の構造を記述する方法についての検討：「運用力」概念の検討を起点として」（2021）および論文②「漢字に関する学力としての「正しい筆順」についての批判的検討」（2021）、発表①「国語教育において形成される漢字観についての検討：「筆順」に関する漢字観を中心に」（2021）である。

論文①においては、先行研究として千々岩弘一と加納千恵子による「運用力」概念を整理した上で、漢字学習の目的（能力観）を漢字学力として整理・記述する方法として、タキシノミーを検討し、特にマルザーノら（2007）による「新分類体系（新しいタキシノミー）」をベース

にして漢字学力についての仮説を作成した(表1)。

論文②および発表①においては、具体的な検討例として「筆順」を取りあげ、筆順を学習する目的について先行研究がどのように議論してきたかを整理した上で、その課題を検討し、学習内容としての筆順について、漢字観(筆順観)の形成という側面からの位置づけを行った。

## 2) 漢字学習の内容の実態

本研究において、特に2)に取り組んだのは、論文③「漢字に関する学習内容としての知識についての検討：小学校国語教科書の分析を中心に」および発表②「漢字に関する学習内容についての検討：生態学的意味論の視点から」(2022)、発表③「漢字のアフォーダンスにもとづく学習内容の検討」(2023)である。

論文③は、漢字学習の学習内容を整理するためのアプローチとして、1)の論文①で設計した枠組みを活用しながら、小学校国語教科書における漢字学習に関する記述を抽出し、その実態を整理したものである。この成果は、小学校国語教科書における漢字学習の内容についてのデータベースとして整理した。表2および表3は抽出した学習内容である。

表1 漢字学力を記述する枠組みの仮説

思考システムの処理のレベル		
自律システム	漢字観や漢字学習観、漢字運用観などにに基づき、思考等に取り組むかを決める	
メタ認知システム	目標を決めたり、運用や知識の状況についての自己評価を行ったりする	
認知システム	知識の活用	状況に合わせ、どのように理解/表現を行うのかを決定/実行する
	分析	自他の漢字運用について分析したり、漢字自体を分析したりする
	理解	未知の漢字や漢語を理解/記憶する
	取り出し	自動的に漢字を理解/表現する
知識の領域		
情報(宣言的知識)	1. 枠組み	・漢字観 ・漢字学習観 ・漢字運用観
	2. 詳細事項	・字形・意味・音・用法 ・漢字の来歴 ・漢字の機能 ・部首 ・語彙 ・辞書 など
心的手続き(手続き的知識)	1. プロセス	・状況に沿う語彙の理解/使用 ・未知の語の推測/調査
	2. スキル	・文脈に沿う語彙の理解/使用
精神運動手続き(身体を動かす手続き)	1. プロセス	・状況に沿う表現手段の使用
	2. スキル	・字形認識(字種識別) ・字形再生

表2 〈一般概念〉および〈時系列〉〈事実〉の分類表

音	音訓	音読みや訓読みなど漢字の読みに関する情報
	音符	形声文字における音符に関する情報
	同音/同訓異字	同じ訓読みや音読みをする複数の字種や熟語に関する情報
	同字異音/異訓	ひとつの字種が複数の音や訓を持つことに関する情報
	熟字訓	熟字訓など特別な読み方に関する情報
形	画(画数)	画や画数に関する情報
	筆順	筆順に関する情報
	漢字の構成	偏旁冠脚など字体を構成する部分に関する情報
	形の相違点	似た字体との相違点に関する情報
意味	語彙のネットワーク	類義語や対義語、同一字種を用いた語彙などに関する情報
	部首	部首(意符)に関する情報
	漢字の表意性	漢字の持つ表意性や象形文字・指事文字・会意文字に関する情報
	字の多義性	ひとつの字種に複数の意味があることに関する情報
用法	送り仮名	送り仮名に関する情報
	熟語	熟語の構成などに関する情報
	語の複合	語の複合に関する情報
	和語/漢語	和語や漢語、外来語など日本語の中の語句の種類とその性質に関する情報
	文の中の役割	漢字が漢字仮名交じり文の中でどのような役割をしているかに関する情報
活用	辞書	国語辞書や漢字辞書に関する情報
	運用/学習	漢字の運用や学習のしやすさ(しにくさ)、学習方法に関する情報
来歴	来歴	漢字の成り立ちや伝来、発展過程に関する情報
	状況	日本語において漢字の置かれている状況に関する情報
音+意味	漢字の表語性	漢字が表音性と表意性を兼ね揃えていることや形声文字に関する情報

このデータベースを用いると、たとえば「音符」についての学習内容について、表4のようなデータを見ることが出来る。このことによって、各教科書会社間によって漢字に関する学習内容の出現には違いが見られることがわかるとともに、それぞれの単元がどのような概念を関連づけて扱うものであるかを見ることができた。

これらのことから、漢字学習に関する学習内容は、学習指導要領においては詳細な記述のないものもあり、各教科書会社の判断による部分が大きいことも指摘することができる。漢字学習に関する学習内容をどのように系統化するかについては、なお検討する余地が大きいと考えられる。

表3 心的手続きの分類表

マクロ 手続き	吟味して表現する	相手や目的に合わせて漢字に関する修辭などを考え表現する手続き
	吟味して理解する	漢字の意味を推測したり、修辭などを考えて理解したりする手続き
	文を考える	漢字を用いた文や文章を考える手続き
	漢字について検討・分析する	漢字についてその機能や特徴、成り立ちなどを検討・分析する手続き
	漢字について調査する	辞書やその他の手段によって漢字について調べる手続き
	誤字を修正する	漢字に関する誤りを修正する手続き
方策	運用・学習方法を考える	漢字を運用したり、学習したりする方法を考える手続き
	音訓を意識する	音読み／訓読みを意識する方策
	音符を意識する	音符を意識する方策
	同音／同訓異字を意識する	同じ音読みや訓読みをする字種や熟語を意識する方策
	複数の読みを意識する	同音異音／異訓など、ひとつの字種の複数の読みを意識する方策
	画（画数）を意識する	画（細部）や画数を意識する方策
	筆順を意識する	筆順を意識する方策
	漢字の構成を意識する	偏旁冠脚や字体の構成などを意識する方策
	似た字体を意識する	似た字体との相違点を意識する方策
	語彙のネットワークを意識する	類義語や和語／漢語／外来語などの語彙を意識する方策
	部首を意識する	部首（意符）を意識する方策
	多義性を意識する	字の多義性を意識する方策
	送り仮名を意識する	送り仮名を意識する方策
	熟語を意識する	熟語の構成や含まれる単漢字を意識する方策
	語の複合を意識する	語が複合することを意識する方策
アルゴ リズム	字体から読み／意味を想起する	字体から読みや意味を想起するアルゴリズム
	読み／意味から字体を想起する	読みや意味から字体を想起して書いたり選んだりするアルゴリズム
	慣習に従う	熟字訓や漢数字等の表記の慣習に従うアルゴリズム

表4 学習内容「音符」に関する単元の一覧

	出版社	学年	単元名	学習内容となっている〈一般概念〉							語彙 熟語	「音符」を どう呼んでいるか
				音訓 音符	同音 異字	漢字 構成	部首	表意性	表語性	来歴		
①	学校図書	3下	漢字のでき方	○	○	○	○	○	○	○		「読み（音）を表す部分」
②		6上	漢字の成り立ち	○	○	○	○	○	○	○		「音を表す部分（音符）」
③	教育出版	4上	漢字の音を表す部分	○	○	○	○					「音を表す部分」
④		5下	漢字の成り立ち	○	○	○	○	○	○	○		「音を表す部分」
⑤		6下	音を表す部分	○	○	○	○	○	○	○	○	「音を表す部分」
⑥		6下	日本語の文字	○	○	○	○	○	○	○	○	「音を表す部分」
⑦	東京書籍	5	漢字の成り立ち	○		○	○	○	○	○		「音を表す漢字」
⑧	光村図書	5	漢字の成り立ち	○		○	○	○	○	○		「音を表す部分」
⑨		6	漢字の形と音・意味	○	○	○	○				○	「同じ部分をもつ漢字は、形ばかりでなく音も共通する場合があります。」

音訓音符…音訓と音符の両方を含む 漢字構成…漢字の構成 表意性…漢字の表意性  
表語性…漢字の表語性 語彙熟語…語彙のネットワーク・熟語

発表②および発表③は、漢字学習の学習内容を整理するためのアプローチとして、漢字を取り巻くことを生態学的意味論の視点から捉え、漢字に関して起こる出来事を記述する方法を検討したものである。このような検討が必要になったのは、論文③において、漢字群を抽象的に一体として捉えたのに対し、実際に運用される個々の漢字には個々の漢字の特性があり、カリキュラムを設計する上では、これらの分析が必要になると考えられたためである。特に発表③においては、個々の漢字を、成り立ち、部首（意符）、音符、音読みや訓読みの種別、誤答要因などを観点としてデータベースに整理することを試み、カリキュラムを設計するための基礎として、各学年の漢字の特性を検討するための基盤を作った。

このデータベースを用いることで、従来の漢字の読み書きに関する大規模調査ではデータとして示されてこなかった誤答要因について、個々の漢字の持つ性質と関連づけることが可能となる。たとえば、表5のように

表5 三拍の訓読みを持つ単漢字の一覧（1年生～3年生）

漢字	訓読み	学年	文字単語親密度	正答率	誤答率	無答率	誤答要因
育	育む	3年	5.33	8.2	34.3	57.5	不明
目	自ら	2年	5.44	11.8	67.5	20.6	同音異字
全	全く	3年	6.73	16	42.9	41	同音異字
幸	幸い	3年	6.27	19.7	42.4	38	送り仮名が不正確
幸	幸せ	3年	6.65	37.4	48.7	13.9	送り仮名が不正確
九	九つ	1年	4.47	42.9	56.1	1.1	送り仮名が不正確
行	行う	2年	6.58	47.4	31.4	21.2	送り仮名が不正確
短	短い	3年	6.69	48.1	45.5	6.3	送り仮名が不正確
表	表す	3年	6.52	56.3	23.7	20	送り仮名が不正確
温	温か	3年	データなし	-	-	-	-
整	整う	3年	5.73	-	-	-	-

どのような学習対象である

かを検討する上で機能すると考えられる。なお、同データベースについて、文字単語親密度は『NTT語彙データベース』のデータを用い、正答率・誤答率・無答率は『小学生の漢字力に関する実態調査2013』のデータを用いている。

### 3) 漢字学習の方法の整理

本研究において、特に3)に取り組んだのは、発表④「漢字学習方略に関する体系的記述についての検討」である。この発表では、国語教育分野・特別支援教育分野・日本語教育分野における先行研究の成果を整理するとともに、各分野の漢字学習方略を統合的に記述するための枠組みについての仮説を形成した。

発表では枠組みを設計し、27点に方略群を整理した。作成したデータベースの一部は、試作段階としてウェブサイトにおいて公開している(表6)。これらの方略については、個々の漢字や学習者の特性によって、その有効性に影響があることも考えられる。たとえば、先述の表5のように、例外的な訓読みについてはこれらをピックアップして意識化する学習なども有効であろう。

このように、各種データベースと漢字学習方略との関連づけについては今後の検討課題である。

表6 漢字学習方略データベース

## 漢字学習方略データベース

方略名にカーソルを合わせ、表示される「開く」を押すと、その方略に関連する論文のタイトルが表示されます。

☰ テーブルビュー ☰ テーブルビュー +

Aa 方略名	☰ 方略概要	☰ 方略群
☑ 誤りやすいケースを意識する	点画の欠落や類似字との混同など、誤りやすいケースを意識化する方略。	計画的に漢字を学ぶ
☑ 既習漢字を再学習する	すでに学習した漢字について、忘れていないかを確認したり新たな意味や読みを学んだりして再度学習する方略。	計画的に漢字を学ぶ
☑ プランニングする	漢字の学習方法を意識化する方略。	計画的に漢字を学ぶ
☑ 遊びながら学ぶ	漢字ゲームなど、遊びながら漢字について学ぶ方略。	漢字に触れながら学ぶ
☑ 実生活の中で学ぶ	実際の生活で使われている漢字を教材にして学ぶ方略	漢字に触れながら学ぶ
☑ ルビ付の文章を読む	ルビのついた文章を読むことで、漢字に慣れる方略。	漢字に触れながら学ぶ
☑ 短文を作る	短文を作ることで、漢字について学ぼうとする方略。	漢字に触れながら学ぶ

以上、本研究では、以下の三点についての検討を行った。

- 1) 漢字学習の目的(能力観)を記述する枠組みを設計すること
- 2) 漢字学習の内容の実態を明らかにすること
- 3) 漢字学習の方法を整理すること

これらの研究の成果により、改めて漢字学習のカリキュラムを再設計するためには、1)に関わる漢字群全体を対象とした漢字学習の目的を記述するとともに、2)における個々の漢字群や学習者のふるまいをデータベースとして記述することで、3)漢字学習の方法と結びつけて検討することができる可能性を指摘することができた。

### 【引用文献】

- ・ Robert J.Marzano・John S.Kendall(2007).*The New Taxonomy of Educational Objectives 2nd Edition*,Corwin Press. 黒上晴夫・泰山裕【訳】(2013)『教育目標をデザインする』北大路書房
- ・ NTTコミュニケーション科学基礎研究所(2021)『NTT語彙データベース』(令和版単語親密度データベース)
- ・ ベネッセ教育政策研究所(2014)『小学生の漢字力に関する実態調査2013』、ベネッセコーポレーション

## 5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計3件（うち査読付論文 2件 / うち国際共著 0件 / うちオープンアクセス 2件）

1. 著者名 富安 慎吾	4. 巻 92
2. 論文標題 漢字に関する学習内容としての知識についての検討 小学校国語教科書の分析を中心に	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 国語科教育	6. 最初と最後の頁 14～22
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.20555/kokugoka.92.0_14	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

1. 著者名 富安 慎吾	4. 巻 90
2. 論文標題 漢字に関する学力の構造を記述する方法についての検討 「運用力」概念の検討を起点として	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 国語科教育	6. 最初と最後の頁 26～34
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.20555/kokugoka.90.0_26	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

1. 著者名 富安慎吾	4. 巻 590
2. 論文標題 漢字に関する学力としての「正しい筆順」についての批判的検討	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 月刊国語教育研究	6. 最初と最後の頁 42-49
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

〔学会発表〕 計7件（うち招待講演 0件 / うち国際学会 0件）

1. 発表者名 富安慎吾
2. 発表標題 漢字に関する学習内容についての検討：生態学的意味論の視点から
3. 学会等名 全国大学国語教育学会
4. 発表年 2022年

1. 発表者名 富安慎吾
2. 発表標題 漢字学習方略に関する体系的記述についての検討
3. 学会等名 全国大学国語教育学会
4. 発表年 2022年

1. 発表者名 富安慎吾
2. 発表標題 国語教育において形成される漢字観についての検討
3. 学会等名 全国大学国語教育学会
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 富安慎吾
2. 発表標題 漢字に関する学習内容についての研究      小学校国語教科書の分析を中心に
3. 学会等名 全国大学国語教育学会
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 富安慎吾
2. 発表標題 漢字の運用・学習に影響する漢字観についての検討
3. 学会等名 全国大学国語教育学会2020年秋期大会（オンライン）
4. 発表年 2020年

1. 発表者名 富安慎吾
2. 発表標題 漢字学力評価の開発のための検討：質問紙調査の試験的实施を通して
3. 学会等名 中国四国教育学会
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 間瀬茂夫・富安慎吾
2. 発表標題 リーディングスキルテストと学力調査の相関からとらえた読解力に関する研究
3. 学会等名 全国大学国語教育学会
4. 発表年 2019年

〔図書〕 計0件

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関